ワクチンで予防できる子どもの病気

諫早市では感染症に対する感染、発病、重症化予防及びまん延防止を目的に各種予防接種を実施しています。子どもは、病気にかかりやすく、かかると重くなることがありますが、予防接種で予防できる病気もあります。予防接種について、正しい知識を持ちましょう。

ロタウイルスワクチン

ロタウイルス感染症：口から侵入したロタウイルスが腸管に感染して胃腸炎を発症します。感染力が非常に強く、手洗いや消毒をしても予防が難しいため、乳幼児のうちにほとんどの子どもが感染します。乳幼児の急性胃腸炎の入院でもっとも多い感染症で、早めの予防が必要です。

ヒブ(インフルエンザb菌)ワクチン、小児用肺炎球菌ワクチン

ヒブ、肺炎球菌：ヒブや肺炎球菌は、小児の敗血症や細菌性髄膜炎、肺炎、中耳炎等の感染症をおこします。5歳までにかかることが多い髄膜炎は、特に感染の初期がカゼと同じ症状で診断が難しく、しかも病状の進行が早いため、命に関わる場合や深刻な後遺症を残すこともあります。ワクチンで早く免疫をつけておくことが必要です。

B型肝炎ワクチン

B型肝炎：B型肝炎ウイルスは、ヒトの肝臓に感染し、多くは出生時又は乳幼児期に感染します。そのうち１０～１５％は感染から年月を経て慢性肝炎を発症し、その後、肝硬変・肝細胞癌を発症することがあります。少数ながら、小児における水平感染や、小児における集団感染も報告されています。

五種混合（DPT－IPV－Hib）、二種混合（DT）ワクチン

ジフテリア（D）：ジフテリア菌の飛沫感染でおこります。症状は、高熱、のどの痛み、犬の遠吠えのような咳、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死する場合もあります。

百日咳（P）：百日せき菌の飛沫感染でおこります。普通のカゼのような症状で始まり、続いて咳がひどくなり、連続的にせき込みます。乳幼児は咳で呼吸ができず、チアノーゼやけいれんがおこることがあります。肺炎や脳症などの合併症を起こすこともあります。

破傷風（T）：土の中にいる破傷風菌が傷口から感染しておこります。菌の出す毒素により口が開かなくなったり、手足のしびれやけいれんをおこしたり、その後の処置が遅れると命に関わることもあります。

急性灰白髄炎〔ポリオ（IPV)〕：「小児マヒ」とよばれ、ポリオウイルスが口に入って腸で増えることで感染します。感染しても大部分の人には症状があらわれませんが、ウイルスが血液を仲介して脳・脊髄へ感染し、片側の手足に麻痺を起こすことがあり、一部の人は永久に麻痺が残ります。

ヒブ（Hib）

BCGワクチン

結核：毎年１万人以上の人が結核を発病しています。咳や発熱が続く病気ですが、子どもの場合、咳などの症状はあまりみられません。乳幼児は結核に対する抵抗力が弱いので、重症になりやすく、結核性髄膜炎になることもあり、重い後遺症を残すことになります。

麻しん風しん混合（MR）ワクチン

麻しん（はしか）：麻しんウイルスの空気感染によって発症します。伝染力が強く、重症になりやすい病気です。発熱、せき、鼻汁、めやに、赤い発しんを主症状とします。主な合併症は、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあります。また、麻しん患者の数千人に１人の割合で亡くなる場合もあります。

風しん（三日ばしか）：風しんウイルスの飛沫感染によって発症します。赤い発しん、発熱、首のうしろのリンパ節が腫れるなどが主症状です。合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。抗体を持たない又は低い抗体価の妊娠中の女性が風しんにかかると、赤ちゃんに難聴や心疾患、白内障などの障害（先天性風しん症候群）が起こる可能性があります。

水痘ワクチン

水痘：水痘（水ぼうそう）は、水痘帯状疱疹ウイルスによって引き起こされる発疹性の病気です。その潜伏期間は感染から２週間程度といわれています。水痘は主に小児の病気で、９歳以下で発症が９０％以上を占めると言われています。１回の接種により重症の水痘をほぼ１００％予防でき、２回の接種により軽症の水痘も含めて発症を予防できると考えられています。

日本脳炎ワクチン

日本脳炎：日本脳炎ウイルスに感染したブタを刺した蚊が人を刺すことによって感染します。感染した後も症状が出ない場合がほとんどですが、高熱、頭痛、嘔吐、光への過敏症、意識障害などの症状の急性脳炎を発症することがあります。また、症状が出た人のうち、約１５％が死亡に至る病気といわれており、乳幼児や高齢者では死亡の危険は大きくなっています。

子宮頸がん（HPV（ヒトパピローマウイルス））予防ワクチン

子宮頸がん：子宮頸がんは、子宮頸部（子宮の入り口）にできるがんで、２０～３０代で急増しています。子宮頸がんの原因とされるウイルスがヒトパピローマウイルスで、このヒトパピローマウイルスへの感染はまれではなく、感染しても多くの場合は症状のないうちに排除されると考えられていますが、感染が続くと一部に子宮頸がんの前がん病変や子宮頸がんを発症すると考えられています。

RSウイルスワクチン（母子免疫ワクチン）

RSウイルス：呼吸器症状を引き起こすウイルスで、発熱、鼻汁、咳、気管支炎、肺炎などを発症します。妊婦が予防接種をすることで、母体内で作られた抗体が胎盤を通じて胎児に移行し、生まれた乳児が出生時から病原体に対する予防効果を得ることができます。

インフルエンザワクチン

インフルエンザ：インフルエンザウイルスの感染により、高熱、鼻汁、咳、全身倦怠感などの症状が出ます。インフルエンザウイルスは、毎年のように変異しながら流行を繰り返しており、これに対応するため、原則的には毎年予防接種が必要です。